

花 き

実 況

1 キク

奥越地区では、積雪がこれまでに全く無かったが、1月15日に今シーズン初の積雪があった（大野市富田地区の実測値5cm）（昨年同時期：0cm、一昨年：60cm）。しかし数日で消雪する見込みで、今後もまとまった冠雪はないと思われる。このため、秋植えギクに関しては、凍霜害防止のため、不織布の被覆が2月から行われると思われる。

夏秋ギク親株の冬至芽摘芯作業は12月下旬に行われた。挿し芽をしてからハウスに伏せこんだ場所では、12月中旬に摘芯が行われた。

病害虫として、白さび病の発生がみられる（写真1）。



写真1 親株に発生した白さび病

丹南地区の越前町では、夏秋ギクの親株は、昨年収穫後の切下株をハウス取り込み前に台刈りを行い、9月下旬にハウスに定植した。12月中下旬にかけては古株整理を行った。生育は昨年より早めである。

病害虫は特に発生していない。

越前市では、夏秋ギク親株は、11月下旬に株ごとハウスに定植した。芽立ちが少なければ、2月から摘心を行う予定である（1月15～16日調査）。

二州地区では、盆ギクの親株における1回目の摘心が終了した（1月14日調査）。

若狭地区では、1月15日の調査で、盆ギクの親株管理が行われている。寒菊は収穫が終了した。昨年より早かった。

病害虫は特に発生していない。

2 スイセン

スイセンの出荷ピークは、12月下旬から1月上旬となり（昨年：12月上旬）、1月末まで出荷が継続する見込みである。1月13日現在の出荷量は68万本で、昨年比92%である（昨年：1月9日現在で72万本）。今年度は花茎の出茎や伸長が場所によってばらつくなど、温度や降水量の影響を大きく受けた。

3 ストック

坂井地区では、夏播き秋冬どりのアイアン系（アーリーアイアン系）は、1月15日出荷で、全体の50%弱の出荷量となった。昨年度の同時期の出荷量が80%であったことから、今年度の出荷はやや遅めである。切り花品質は良好で、昨年よりも高値で取引されている。

病害虫として、菌核病と半身萎凋病が部分的に少発生している。葉先が白く枯れる凍害症状は微～少発生程度である。

越前市ではスプレータイプのカルテットシリーズが8月20日～9月20日頃にかけて直播された。8月20日頃に播種された品種は収穫がほぼ終わっている。8月末に播種された品種は草丈が82 cm（昨年：80 cm）、収穫後半から終りに近い（昨年：収穫後半から終わり近し）。9月10日頃播種の品種では、草丈78 cm、蕾径8 mm程度、摘芯が行われているが収穫には至っていない（昨年：草丈82 cm、蕾径10 mmで未収穫）。9月播種の個体の生育は昨年よりやや遅れ気味である。

二州地区では、8月中旬～9月上旬に播種された品種では開花が始まっている。例年年明け前に出荷されているが、今年は出荷が遅れている。9月20日播種・10月20日定植の品種では、草丈35 cm、展開葉38枚で出蕾中である。昨年より生育は遅くなっている。

病害虫として、灰色かび病が微発生している。

5 トルコギキョウ

あわら市の抑制栽培（二度切り栽培）では、切り下株の保全を行っている。

病害虫は特に発生していない。

越前市では、9月中旬に播種、11月14日に定植された品種で、ビニールトンネル被覆が行われている（1月15日～16日調査）。

6. その他

二州地区のウメ花枝は100～120 cm規格は門松用、45～25 cm規格は添え物用としての需要が多い。全出荷量は109万本（昨年：117万本）で、昨年比93%であった。今年は花枝の伸びが悪く、25cm規格のものが多かったため、販売金額も昨年比91.5%であった。

対 策

1 8、9月咲きギクの親株管理と採穂

- 1) 8月咲きの「小鈴」等生育が悪く、芽立ちが悪いなどの場合、1月下旬から2月上旬にかけて、地際部より3～5 cm（葉3、4枚）を残して冬至芽の摘芯を行う。芽立ちのよい品種では地際部で、芽立ちの悪い品種は地際からやや上がった部位で一斉に摘心（刈り込み）する。
- 2) 挿し穂は摘心をしないで冬至芽をそのまま利用すると、心止まり症状や生育開花が不揃いとなる。また、夏ギクは親株時に高温に遭遇すると挿し穂苗の開花が早まるため、ハウス内が高温にならないように換気の励行を行う。
- 3) 作業時期目安

作 型	定植日	仮植期間	挿し芽日	冬至芽摘心日
仮植育苗の 8月咲き	4/15	3/25～4/14 摘心4/1～4/5	3/11 15℃温床育苗	1/25～2/5
8月咲き	4/15	—	3/26	2/5～2/15
9月咲き	5/15	—	4/30	3/10～3/20

※仮植育苗は8月咲きの「山手白」、「広島紅」、「夏晴」などの旧盆に間に合わない品種に利用する。

2 親株の病虫害防除

- 1) 苗による本圃への病虫害の持込みを防ぐため、病虫害の防除を徹底する。
- 2) 新芽の伸長が始まってからは、週1回の防除を励行するとともに、晴れた日には十分に換気し、白さび病等の病害発生を抑制する。
- 3) 散布は晴れた日に行い、夜間までに植物体に散布した薬液が乾燥していることがのぞましい。
- 4) 床と通路へのモミガラマルチにより、土壤水分を保持し、灌水回数を減らす。

白さび病が発生していない親株は、ジマンダイセンフロアブルやコロナフロアブル、ステンレスなどを週1回定期散布する。発病している場合は、病斑（冬胞子堆）のついた葉を取り除いてからチルト乳剤25（EBI）、ピリカット乳剤、ストロビーフロアブル等の治療剤を散布する。感受性が低くなった（効果が低くなった）薬剤は使用しない。また、効果がある薬剤であっても、同系統剤の連用で効果が低下しないように、異なる系統剤をローテーションで散布し、同じ薬剤や同系統剤をしばらく使用しない。



写真2 親株についた黒さび病

- 5) 親株搬入時に黒さび病（写真2）がみられた場合は、罹病葉を除去し、ステンレス等を早い時期に散布する。摘心後の新茎葉への感染を抑制するため、新シュートが出始めたステージ以降、週1回予防剤を散布する。

3 トルコギキョウの育苗管理

- 1) 播種から子葉展開後まではしっかり灌水する。本葉が展開するまでは、乾燥させないようにする。
- 2) 晴天時は乾燥しやすいので、ミスト灌水の場合はこまめに散水し、用土表面の乾燥に注意する。底面給水では、過湿になりすぎないように、過剰な水を排水できるようにしておく。灌水は日中の暖かいときに行い、冷たい水を灌水して根を冷やさないようにする。
- 3) 空中湿度が低いと苗（葉）がなかなか大きくなる。温風暖房機等で加温している場合は、床への灌水等により湿度を保つように工夫する。
- 4) 発芽後、本葉が重なると軟弱徒長や病害の原因になるので、苗の生育状態に応じて、早めに間引きする。
- 5) 定植した苗については、過湿圃場では接地面から白絹病が発生するため、表土が過湿にならないよう心掛ける。
- 6) 県内の冬季の日照は、トルコギキョウの生育にとって十分でないため、トンネル被覆等を行っている場合は、光が十分あたるように留意する。

4 スイセンの開花後の管理

- 1) 露地の栽培で12月にそさい5号を20 g/m²施用した圃場には、再度2月上旬にそさい5号を20 g/m²施肥する。
- 2) 12月に施肥を行ってない圃場では、消雪後、2月上旬にそさい5号を40 g/m²施肥する。
- 3) 水が入る圃場では、排水対策を徹底し、2月上旬と中旬に分肥してもよい。畝間に水が停滞しないように、排水対策もしっかり行う。
- 4) ハウス栽培で12月にそさい5号を20 g/m²を施用した圃場には、切り花採花後の球根を肥大させるため、そさい5号を2月上旬までに20 g/m²施肥する。12月に施肥を行ってない圃場では、2月上旬までにそさい5号を40 g/m²施肥する。ハウスの温度管理は、10℃～25℃の範囲で管理する。

AMeDAS のデータ

